

スライド 1

生業の速度

この人がオリジナルの試行錯誤の経験の上に築いたアイデア(速度)

自身の実践と体験がオリジナルの速度をつくる

千日の稽古を持って鍛 万日の稽古を持って錬

他人のアイデア(速度)はあくまでもヒントでしかない。そのまま利用しても経験と体験をしなければ身につかない

新しいアイデア

比較するのは他人ではなく昨日の自分。同じ(時間)で効果(距離)を伸ばしたか? 同じ効果(距離)を短い(時間)でできたか?

自身の経験と実践で知らず知らず身に付けていく(自分の慣性系)それが誰にも盗まれない(誰も追いつけない)速度。その速度を持つことが唯一無二の存在である

スライド 2

先週の話ですが、自身の比較を他者として足りないものを買ったりとかではなく、ヒントをもらうだけです。結局自身の成長は自分のとの比較をすること、何よりも昨日の成果よりも自身の取組を通じた工夫や挫折の経験の上に集積していきますこれが誰にもまねできない速度の作り方です。だから、他の人の素晴らしいところもその方が長年かけて体に染みつかせた独自で、唯一無二のものであることを理解しましょう

スライド 3

生業の速度

慣性の輪

他者との比較

自分自身の比較

グループや共同体での事業の持ち回りや異業種分担での利益はある

同業他社や流行の金額化や商品化された取組や投資で新たな付加価値を見つける

グループ経費・原価や資金力

誰でも手に入れられる

成果のための創意工夫の連続による体験上の自分の成長要素

自分で作った速度ではなく外部の資源での外的要素(外部制御)である

内的成長要素

スライド 4

皆さんも仕事で想像してください。つまり慣性の同じグループ内の生業はグループ内での分担で仕事は来ます、そしてあまり競争力が成果やサービスに届くことがなく原価や単価などの原価効率へと進む傾向があります。同じく共同や大きな資本力でたやすく材料やサプライチェーンが使える、経費的なメリットも備わり、このグループから外れないようにすることが目標となってきます

同業他社などの市場の比較ではすでに市場に出回っている新型の機械やサービスなどのインフラを持ちますが、これによる付加価値は差がありません。誰にでも手に入れられることはオリジナルの速度や加速度にはなり得ません。外部から成長要因や資源は自身の速度には一瞬なりますが、自身でコントロールできず持続的に使用することはできません。風化しても自身ではどうしようもできないのです

やはり自身の経験と鍛錬によってのみ自身の加速度として存在をします。内的な成長の根拠となることが自身の加速度なのです

スライド 5

生業の速度

日本の速度はどこから

自分自身の比較

様々な環境で確実に

率に効率よくする

最高の成果を目標に

道具を作れること

同じ時間でより多く、より素晴らしい成果物を得る努力の積み重ね

成果物効率が加速度です

スライド 6

この内的な成長、つまり自身の生業を加速させる試みは日本人の代名詞であり、産業立国として下支えをしてきた歴史にあります

私たちの祖先は狭い小さな田んぼを開拓し、灌漑用水を考え、季節によって収穫つまり成果物を変えて大きな成果を常に目標にしてきました。その中で誰にでも簡単に楽に作業ができる、つまり昨日よりも常に進歩した取り組みの成果は様々な道具という形になってきました。今までにいくつものカンナやノミ、のこぎりの種類があったでしょうか。細かな作業や最高の成果を効率よく導く努力こそが速度であります。つまり成果物への効率を上げることこれが加速度で自身の体内に鍛錬として身についた加速度で、唯一無二です。誰にもとられません。

スライド 7

生業の速度

誰でも手に入れられる

その速度は本物か

成果のための創意工夫の連続による体験上の自分の成長要素

グループ・原価や資金力

競争(成果や単価)のない場所での努力は原価低減などの他社をマネジメントすることが多い

市場にある形式化され交換できるもの要素を手に入れるが等価以上の価値にはならない、出来ない。

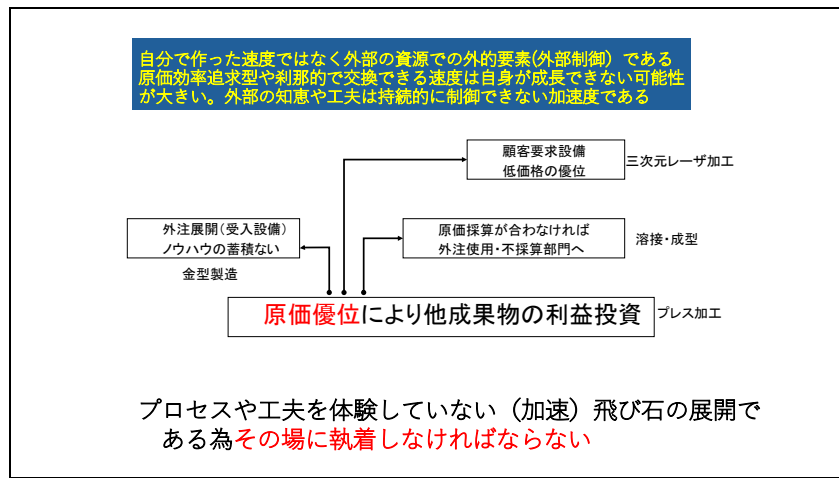
自分で作った速度ではなく外部の資源での外的要素(外部制御)である。原価効率追求型や利根的で交換できる速度は自身が成長できない可能性が大きい。外部の知恵や工夫は持続的に制御できない加速度である

自分の生業(成果への努力)で培った経験上の知恵や工夫の集積はいつでも発動できる加速度

スライド 8

大事なことは今の目の前におられる会員のアイデアはその人の通ってきた道で一番最適な生業の結果を生んだものであることです。1日の起きている時間の多くを使った仕事で工夫を行った自身の経験からしかアイデア(速度)を生めません。先ほどのグループ内の慣性の速度は利益に注視をします。原価低減などの他社へのマネジメントが主流です、また他社と比較してあんな便利な、効果的なサービスなどを生む仕組みや装置、投資などで一瞬は速度に乗って利益は出ますがそれも、人と差があるものではなく、有限です。すぐに風化つまり速度は持続しません。ここで大事なことは2つとも自分で作った速度ではない事です。自分で制御できる速度づくりが大事。成果物への効率を上げる訓練がそれです。

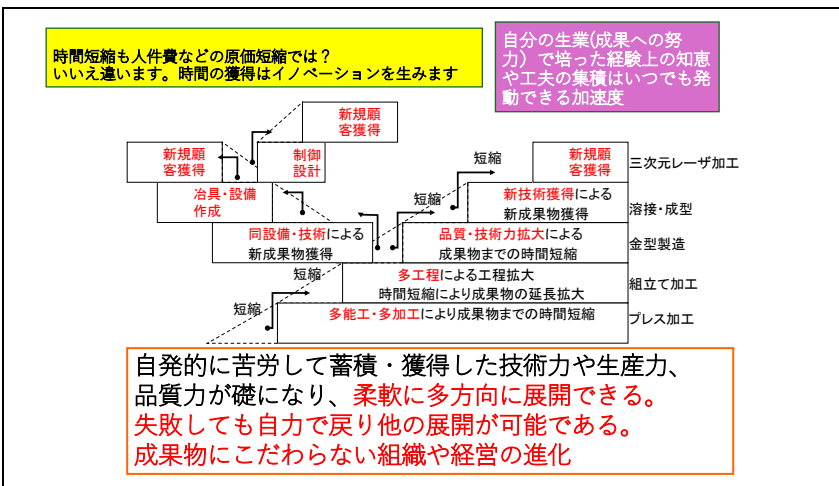
スライド 9



スライド 10

他者の速度やモノを使って成長することは悪くはありません。ただ自身の速度も持っていないと、ということです。これは利益のために原価を低減したり、投資を行った悪い例ですすべての意思決定が短期的な原価採算で決まったりしてきます。組織全体が原価低減のマネジメントであり、新たなノウハウや新技術、サービスを作り出すことができなくなってしまいました。

スライド 11



スライド 12

いろいろな試行錯誤が現場で生まれる、マネジメントでは成果物への効率を上げることとなります。昔の田畑から道具への思い付きです。そこでは時間が産物として生み出されず。時間も人件費削減のための原価低減のマネジメントではと反論があるかも。イノベーションの産物は時間で私たちはお金や装置とかよりも時間を投資することが大事です。自分で進む紆余曲折は元に戻ってやり直しや新たな成果物への誕生とかを生みます。これが自身で制御できる速度ということです。つまり速度が自身の中に「在る」ということです

スライド 13



スライド 14

交換出来たり、持ってる速度の輪に入ったりでも利益はあります。ただ、持続的でなかったり消費的な生業の活動となるかもしれません。一方、自身で成果物への効率を考えてみてついた加速で速度を自分で制御できることはある意味無限に使えます。皆さんは生業を通して気づいた速度を「持つ」「在る」どちらが今後大切だと思いますか。そしてロータリークラブではどちらを鍛える場でしょうか、また皆さんの「持つ」が「在る」のどちらを奉仕活動として使うべきでしょうか